

翻 訳

清仏戦争期の中国海軍（1884～1885）

原書：John L. Rawlinson, *China's Struggle for Naval Development 1839-1895*, chap. VI, pp. 109-128, Harvard Univ. Press, 1967.

ジョン・L・ローリンソン
訳：細見和弘

フランス帝国主義は、18世紀の後半からアンナンにいつそう公然と姿を現すようになった。太平天国の乱が鎮定されるまでの間に、フランスはコーチシナの一部とサイゴンを奪い、それからのにに紅河デルタとハノイを手に入れた。1874年にフランスは、グエン朝皇帝〔嗣徳帝（在位1847-83）〕とサイゴンで条約を締結し、その領域をフランスの保護領とした。中国は、日本を巻き込んでその条約を非難し、アンナンは中国の属国であると主張したが、何の行動も起こさなかった。実際、1880年にアンナンは中国に進貢した。紅河上流を航行するフランス船は、劉永福の軍隊〔黒旗軍〕に悩まされた。以前太平天国軍に属していた劉永福は、その軍隊を中国の南の国境に移動させていた。フランスがアンナンの独立を宣言したのち、1882年に清朝正規軍は南方に移動した。1884年まで劉永福の黒旗軍は中国正規軍の一部となった。そして、交戦が始まった。宮廷は、依然として動揺していた。一方で、恭親王奕訢と軍機大臣〔恭親王以下の全員〕が無能であるとして罷免された。他方で、李鴻章には交渉するよう指示が出された。1884年5月の李＝フルニエ協定では、中国の宗主権が継続していることを明文化することが曖昧にされ、それと同時に1874年の条約を認めた。中国軍は撤退することになった。ところが、中国は、1884年6月23日の北黎における戦いに勝利し、フランスは、中国が以前から拒絶していた賠償金の要求に回帰した。フランスは、中国沿岸で海軍の増強を開始した。そして、それに引き続き、海軍による（時には軍艦から陸地に向けて）戦闘が幾度も起こった。フランスは、これらの交戦の全てに勝利したのではない。しかし、戦争に勝利を取めたのである。

結果的にアンナンを喪失したことは、中国の儒教的君主政体に対する重大な一撃であった。というのも、そのことは朝貢体制を一層弱体化させたからである。日本は、琉球を獲得することで朝貢体制に損傷を与えていた。モース（Morse）とマクネール（MacNair）は、「帝国の弱体化」と題された一章の中で、清仏戦争について書いた。実際、中国はイリでロシアに対し外交的勝利を取めたし、アンナンではフランスに対し軍事的勝利を取めたのであるから、中国の敗戦を説明するのに、単純に中国は弱かったとは言えないのである。李劍農は、フランスは「僥倖」により勝利し、中国は「決断力が乏しかった」¹⁾ために敗れたと論じた。決断力の欠如は存在した。しかし、それは問題の一部分に過ぎない。本章では、彼の国の近代海戦で中国が敗北した理由を詳細に明らかにする試みとして、二つの主要な海戦に関する挿話、すなわち1884年8月23日の馬江の役と、1884～1885年にフランスによる台湾封鎖を打ち破ろうとした中国側の試みに焦点をしぼ

ることにする。

1884年に中国は、近代的海軍の軍艦を50隻以上有していた。その半数以上は、国産であった。残りのうち13隻は、アームストロング製の砲艦であった。²⁾ 2隻はアームストロング製の巡洋艦であり、2隻はドイツ製の艦船であった。それらの一組は、各艦がそれぞれ約1,300トンと約2,300トンを擁し、ドイツ製の一組には、各艦に2門の8インチ砲が搭載されていた。これらの二組は、「超勇」^{ちょうゆう}と「揚威」^{ようい}、「南琛」^{なんちん}と「南瑞」^{なんずい}であり、それぞれ北洋大臣と南洋大臣の艦隊に属していた。

一つの「全国的な (national)」艦隊は、まだ存在していなかった。広東における砲艦と水雷艇を数に入れば、中国はなお四つの近代的海軍を持っていた。広東と北洋の艦隊 (規模では、4番目と2番目) は、戦争にほとんど巻き込まれなかった。南洋大臣は最も大きな艦隊を擁し、おそらく南洋沿岸の沖での海戦に直接の責任を負っていたのであるが、ただ不承不承に遅れて参加したに過ぎなかった。福州ドックの停泊所で戦った馬江の役で、ほとんど単独で戦ったのは福州の近代的小型艦隊であった。そして、約15分ほどでほとんど全滅させられたのである。³⁾

華北では、李鴻章が旅順^{りょじゅん} (Port Arthur) の大規模要塞を建設していたが、これについては後ろの章で論じる。フランスの脅威が強まることで、沿岸に新たな要塞建設工事の疾風が生じたのである。全ての防御工事が、鋼鉄製やコンクリート製であったわけではない。中国地方官僚の何人かは、最も近代的な方策で要塞を補った。すなわち国際法である。⁴⁾ 両広総督 [カントン・カンシー両省を統轄する] の張之洞^{ちやうしどう}は、1884年の初めに要塞を建設し、河を封鎖して、法律の上で封鎖を正当化しようとした。外国領事の異議申し立ては一本化されていなかったもので、張之洞は彼の目的をほとんど達成した。米国人牧師のヤングは狼狽した。なぜなら、張之洞が北京の許しを得ないで、平和的で中立的な通商を中断させたからである。⁴⁾

国際法は、福州船政局の防御にも必要とされた。福州沿岸と閩江の河口において、要塞は不足していなかった。⁵⁾ 近代的外国製の大型砲が数多く存在し、それらは、水雷^{すゐらい}、沈めた帆船、陸軍、水軍部隊により補充された。鋼鉄による厳重な包囲もなされ、約12マイル川上の船政局へ進入する方向に舗道も存在した。河の主流の入口のちょうど内側に、鎮海^{ちんかい}の要塞があった。ここには満洲人の将軍の司令部が置かれていた。その要塞は、先頃強化され、6インチのプレートの砲座の中に8.5インチのクルップ砲がもたらされた。対面していたのは、長門^{ちやうもん}の要塞であった。そこから河の上流には、他の砲座があり、アームストロング製の大型砲と鋼鉄製の耐爆掩蔽設備 (casemate) が備え付けられた。フランスが8月23日の馬江の役以後、背後から (造船所の下流のおよそ9マイルの位置にある) 閩安^{びんあん}の軍営 (Min An Pass forts) に到達するまで2日を要した。船政局そのものと船政局を取り囲む丘は、別の位置にあり、最近強化されたのであった。⁶⁾ 多くの大型砲は、旧式の前装砲であった。後に宮廷自身が準備の不十分なことを認めた。⁷⁾ しかしながら、馬江の役における戦闘は、これらの要塞の後方である上流で起こったため、この砦^{とりで}のほとんどは全く役に立たなかった。フランスが李 = フルニエ協定を拒絶した後、中国人指導者の間では、中仏関係に関する国際法上の影響について不確実であった。異常 [が起こった原因] は、ある程度はこのように説明される。

1884年、中国全体において、特に福州船政局では、指令体系が混乱していた。春に [ベトナムの北寧^{バクニン}] 敗北した後、(総理衙門と軍機処の成員であった) 恭親王とその同僚たちは、罷免させら

れた。宮廷内の新しい首席顧問は、醇親王奕譞^{じゆんしんのうえきけん}であった。総理衙門の首班には慶親王奕劻^{けいしんのうえききやう}が就任した。ハートは、これら経験を持たない人達の栄達を懸念した。李鴻章は北洋大臣であった。南京における李の相棒〔南洋大臣^{そうこくせん}〕は曾國荃⁸⁾であった。何璟が閩浙總督〔福建・浙江の両省を統轄〕であり、福建巡撫は（その年の一時期）劉銘伝^{りゆうめいでん}であった。浙江巡撫は劉秉璋^{りゅうへいしょう}であり、福州將軍^{ぼくとぜん}は穆圖善であった。福建海防の副官〔會辦福建海疆事宜〕には張佩綸^{ちやうはいりん}がなり、福州船政局の監督〔督辦船政大臣^{かじょしょう}〕は、何如璋^{かじょしょう}が就いていた。この官職は、福建艦隊の責任を負う。約10年前に福建船政学堂を卒業した張成^{ちやうせい}は、旗艦である「揚武」の艦長で、諸艦船の戦術上の配置を担当した。

全国的にも地方にも、明確な指揮系統が存在しなかった。李鴻章や曾國荃も、宮廷が下した指令を伝えたり、北京に報告を上げる常時連絡役として仕えたわけではなかった。上海道台ですら、総理衙門に直接報告した。そして張之洞は、名目上は曾國荃の指揮下にある諸艦船の軍事行動について一度報告⁹⁾していた。

指令の連鎖が混乱していたために、合法的な状況について決断できない状態は、一層ひどくなった。中国は、馬江の役が終わって初めてフランスに宣戦した。一方、フランスは宣戦を布告しなかった。それゆえ、フランス艦船は、船政局を防御している要塞を素通りすることを許された。1884年7月11日に李鴻章が、宮廷に対し、フランスは賠償金をあらためて請求するために船政局の奪取を目論んでいると警告したにもかかわらず、そうした事態が発生したのである¹⁰⁾。

7月13日に福州の当局者は、損傷を受けたフランス艦船を修理することを拒否した。「軍人」^{ぼくとぜん}（穆圖善か？）は河を封鎖することを望んだが、その区域の他の指導者たちから同意を得られなかった¹¹⁾。

同日、張佩綸は京師に打電して、フランス領事からの報告を伝えた。その中身は、フランスの軍艦2隻が間もなく川上の福州船政局に到達するであろうというもので、所定の強国の軍艦2隻が交戦状態の存在しない他の列強の諸港に入ることを認める国際慣習にかこつけた行為であった。張佩綸は、総理衙門からの指示を仰いだ¹²⁾。7月17日にクールベ提督は、彼の旗艦「ヴォルタ (Volta)」に乗って河に到着した。それから間もなくして、さらに3隻のフランス軍艦、「デスタン (d'Estaing)」、 「デュゲイ・トルーアン (Duguay Trouin)」、 「ヴィラルール (Villars)」が続いた。穆圖善は、これらの艦船の侵入は違法であると呼びかけた。しかしながら、総督〔何璟〕は穆に彼の要塞¹³⁾を使用させなかった。

他のフランスの軍艦は、4,727トンの「トリオンファン (Triomphante)」を含め、福州 (Min 閩) に集結しつつあった。この軍艦は、重量が余りに重かったので、河を遡上する前に軽くしなければならなかった。7月21日が、新たな賠償金協議の想定上の期限 (supposed deadline) であった。その日、馬江に4隻の中国軍艦が停泊していたのに対し、4隻のフランス軍艦が存在した¹⁴⁾。にもかかわらず、張成は、開戦前に彼が適切な警告を与えるべきであると言われた。7月22日にクールベは、彼の軍艦のうち2隻を引き揚げた。張佩綸は、この撤退は自分の軍備の成果であると主張した。張の軍備の中には、沿途^{あまた}で数多ある太鼓を打ち鳴らし旗幟^{きし}を誇らしげに林立させている陸上隊伍が含まれていた。しかしクールベは、彼自身の理由があったので船を撤退したのである（その一つは、基隆^{キールン}向け救援物資の供給を妨げることであった）。そして間もなく、フランスの優位が回復¹⁵⁾された。

8月の初めに、張佩綸は、まだ手詰まり状態について話すことができたし、フランスがより多くの艦船を送り込もうと努めるなら、河を封鎖することを総理衙門に助言できた。広東に居る張之洞と違って、張佩綸は、河道を封鎖することに許可を求めた。ところが総理衙門は、他の外国船が閩江におり、それら諸船の利益が考慮されねばならないと慎重に返答した。この時、国際法は依然としてフランスに有利に働いていたように思われる。実際、総理衙門は張に対し、封鎖に同意するよりは、造船所〔フランスが〕破壊することを公認したのである。¹⁶⁾

この全ての期間を通じて、中国近代海軍の増援に動こうとする企てはあったが、地方の指導者が福建艦隊から「配分された」艦船を返すよう要求した時ですら、いろいろと困難なことに出くわした。最初に救援を求めたのは、穆図善であった。それは7月17日にクールベが河を遡上するちょうど前の出来事であったが、7月11日に李鴻章が警告した後であった。宮廷は言葉で慰撫しながら返答し、曾国荃と李鴻章が彼らの必要としている艦船を派遣することを約束した。¹⁷⁾7月19日には、何如璋も救援を求めた。何は、最初に4隻の敵船が到来したのに対し、自分は「揚武」「福星」「福勝」「建勝」から成る弱い戦力で対抗できるだけであると報告した。賠償金協議の期限である7月21日以後、張佩綸が、「ちょっと負けたくらい」なら後で取り戻せるだろうと総理衙門から言われていたにもかかわらず、何如璋は、將軍に対し戦争の準備をするよう指令を出した。何は皇帝と西太后に救援を直訴したが、南北洋大臣は何もできないという、きっぱりとした返答を受け取った。そして何如璋は、最善を尽くさねばならなかった。穆図善は、もし攻撃されれば抵抗するように命じられた。しかし、援軍の約束はなされなかった。何と張は、再び助けを求めた。¹⁸⁾

7月24日に浙江巡撫劉秉璋は、軍機処に打電し、張佩綸が「超武」を馬尾に派遣するよう彼に求めたことを報告した。劉秉璋は、その船を割くことはできなかった。劉は自分以外の者が代わりに助ければいと提案した。宮廷は、李鴻章に対し、船政局に2隻の艦船を派遣するよう命じた。張佩綸は、上海でフランスの軍艦1隻が6隻の南洋艦船により目撃されたことを報告した。ところが福州の当局者は、より多くの艦船を必要としていたのに、朝鮮で日本の脅威に対抗する手助けをするため艦船を派遣するよう求められてすらいた。間もなく李鴻章は李への命令に対し、船政局のために艦船を割くことはできないと返答した。実際、華北の方が華南よりも重要だったのである。張佩綸は機転を利かせてこの返答に同意し、南洋に船政局への救援を求めた。宮廷は、外交交渉がなお進行中であると言うことができただけであった。もし交渉が決裂していれば、船政局を救援するよう指令が出されたであろう。これらの要請、指令、返答は、7月24日と29日の間に起こった。¹⁹⁾想定された期限のかなり後のことであった。

張佩綸は、アンビバレンスな精神状態にあった。張は自分の弱点と、紳士に〔省城内外にある〕保甲を活用させ、人民の志気を固めよう努めることについて報告書を書いた。〔壺江各村で漁団を組織する〕漁民であっても分相応に力を尽くすべきであるとまで書いているのである。張は、最終的に決裂することに反対すると主張した。しかし張は、交渉の継続にも反対し、フランスは威嚇しており、中国は閩江の速い潮を利用して攻撃することを主張した。張の書いた報告が送られている間、張は7月27日に電信を打ち、主導権を握ることの優位性を力説していたが、依然として助言を求めていた。²⁰⁾

援軍が本当にやって来た。張之洞は、「飛雲」と「済安」を派遣した。これらの艦船は、おそ

らくアンナン海域で見せ掛けのために広東に派遣され、福州で管理されていたのであるが、そのまま留まって広東の艦船になっていた²¹⁾。しかし李鴻章は、8月7日に至ってなお彼の北洋艦隊の艦船を1隻たりとも派遣することに反対した。(弱体であると評される)彼の艦船は、船政局に到達を果たす前にきつとフランスに阻止されるだろうと主張したのである。²²⁾

8月12日に、張佩綸、何璟、穆図善は、指令を求める建議を連名で行った。彼らの艦船は包囲され、さらに多くの敵船がこちらに向かっている、と彼らは陳べた。もし戦闘が起これば、中国が主導権を握れるように、指令は秘密にされた。北京からの返答は、「予期されることが何事も発生しないように」準備することを彼らに勧告した。²³⁾8月14日に宮廷は、曾国荃に対し「開済」^{かいさい}を船政局に派遣するよう命じた。曾は難色を示した。こうした指令に尻込みをする將軍たちを寛大に扱ってほしいと求めたほどである。官僚たちの中には、そのような従順さに欠ける將軍たちを斬首せよと明言する者もいた(戦時統制下にあつては普通のことと思われる)にもかかわらず、宮廷は曾国荃に賛同し、懲戒するために斬首するのは不適當であることを認めた。そのうえ、張佩綸は「論争したこと」を咎められ、自分を弁護するために時間を割かねばならなかった。²⁴⁾

他方で、8月18日の諭令は、戦争になると予想されること、將軍、総督、巡撫が敵からの攻撃を受けた場合、随意に攻撃すべきことを命じた。戦略に関する帝国の見取図(delineation)は、与えられなかった。穆図善は、戦争は避けられず、すでに馬尾に達していたフランス船は「閉じ込める」べきであるが、まだ達していない船については「締め出す」べきであると命じられた。²⁵⁾

福州の当局者は、地方の郷紳が外国人の倉庫を破壊し、それで恐るべき復讐を招くのではないかと危惧した。他の艦隊は、参加していなかった。確かに、戦いに敗れば、叛乱を招くであろう。南洋艦隊と北洋艦隊に来てもらおう！ それでもやはり、8月20日に宮廷は、軍隊を増援するのは得策なのかどうかを李鴻章と曾国荃に諮問した。張佩綸には、議論がなお進行中であり、張が待機して引き続き「密かに準備する」よう命じられた。宮廷は、天津と南京は救援するよう指令されたと言った。次の日、曾国荃は、江南地方を防御する任務を単独で行うこととされ、李鴻章は大型のドイツ製大砲を購入して福建に送るよう命じられた。²⁶⁾李劍農は中国の敗北について説明する際に「優柔不断」と言うが、宮廷によるこれらの遅れた行動は、その好例である。

8月22日に何如璋は、和議は成立しなかったものの、フランスとの関係は壊れたわけではないと信じていた。何はさらに多くの艦船が到着した時、「断固として譲歩しない」ことを選んだ。その日、他の福建の指導者たちは、戦争は避けられないように思われると報告した。それまで中仏の軍艦の近くに停泊していた英米艦は、21日に立ち去った。援軍が必要とされていた。これらの最後の要求は、例によって帝国の同意を引き出した。李鴻章と曾国荃に対し、艦船を派遣して、「区域主義(province-minded)」に陥らないようにせよとの「確固たる」指令が出されたのである。この指令は、役に立たなかった。戦闘は翌日に始まったのである。²⁷⁾

通信する際に電信が広範に使用されたにもかかわらず、これまでに論じた者が居るように、電信は帝国を中央集権化しなかった。総督・巡撫たち(regional and provincial officials)は、文書化された諭令を受け取ってから、流暢に異議を申し立てるまでの間に通過する時間に昔は頼っていたかも知れないが、電報が通じるようになって、彼らは服従する準備をするよりも議論をする準備をしていたように思われる。²⁸⁾

1884年8月23日に馬尾に停泊していた近代的中国艦隊は、11隻を数えた。全ての艦船が建造さ

れてから少なくとも9年を経ており、木造の「見た目は優雅だが、軽量な」船であった。旗艦の「揚武」は、約1,400トンの排水量を擁し、大きさは「琛航」や「永保」に匹敵した。とはいえ、「永保」は、船政局に行く途中で破壊され、戦闘に何ら貢献しなかったのであるが。「伏波」^{ふくは}、「飛雲」^{ひぐみ}、「済安」は、1,300トン級であった。「振威」と「福星」は、その約半分の大きさであり、「芸新」^{げいしん}は、それよりもずっと小さかった。「福勝」と「建勝」は、沈葆楨が購入した米国製の砲艦で、1876年に引き渡された船であるが、250トン級であった。防水の隔壁が、「多かれ少なかれ」これらの船を保護していた。円柱形の水雷が備え付けられた、7隻の「並の汽艇(launch)」もあり、同じ武器を携える3隻か4隻の「手こぎボート(rowboat)」もあった。12隻の「非常に大きな」戦闘用のジャンク船も持ち合わせていた。艦船は、数週間の間フランスの大砲に「狙いを付けられた」ままの状態に置かれた時、「全く信じられない」ような不屈の精神を發揮した1,190名が乗り組んでいた。汽船については、ただ5隻だけが航行中であった。それで船の能力は、交戦における一要素ではなかつた²⁹⁾。

馬尾の停泊地に錨を降ろしていた8隻のフランス艦船は、総じて中国の艦船より優れていた。軽量にされた「トリオンファン」は、4,727トンと見なされた。最も小型のフランス艦船は、それぞれ約470トンの「ランクス(Linx)」と「アスピック(Aspic)」であった。「揚武」よりも、「トリオンファン」³⁰⁾、「デュゲイ・トルーアン」³⁰⁾、「ヴィラルール」³⁰⁾、「デスタン」の方が、格段に優れていた。なかには船体の様式が木鉄船(composite)の船もあったとはいえ、フランス艦船の全ては装甲艦(armored-clad)であった。フランスは、円材を備え付けた速度16ノットの水雷艇(torpedo launch)2隻を持っていた。一人の西洋人は、「機械技術の勝利」である大砲と共に、フランス艦船を「造船学の模範」と呼んだ³⁰⁾。

軍備の標準化が未だなされていなかったにせよ、中国の艦船はまずまずの軍備であった。停泊港に錨を降ろした11隻の船にある56の主な軍需品のうち、二つは8インチ砲で、411ポンドの砲丸を発射する。およそ30は、ちょうど6インチ口径のフランス製ヴァヴァソールであった。同時に一斉発射した際の総重量は、4,500ポンドであった。フランスは、その艦砲6門がほとんど10インチに近いものであり、同時に6,000ポンドを発射することができた。フランスの優位は、圧倒的とはいえなかつた。これらの計算は、理論の上での最大限である。こっそり忍び込んだり、或いは狡猾に立ち回るべく、策略を弄する余地は存在した³¹⁾。

もし決断力があつたなら、中国人は最後の好機を物にしていたかも知れない。馬尾の停泊港における土壇場のタイミングが重要であつたらう。というのは、時間は潮の満ち干を意味しており、潮の速度が速かつたからだ。沈葆楨は、1867年には既に潮の速度について言及していた³²⁾。馬江の役が起る以前に、艦長の張成は諸艦船を散開させたのであるが、その動きは、ある意味で、後に非難する者がいうほど「すばやく」はなかつた³³⁾。旗艦の「揚武」は、羅星塔(Pagoda Point)の上流で一艦隊の中心に置かれた。そこは船政局からは離れた場所であつたが、小型フランス砲艦である「アスピック」³³⁾、「ヴィペール(Vipère)」³³⁾、「ランクス」の3隻と旗艦の「ヴォルタ」には近かつた。紛れもなく、下流の方向に移動すると、より重装備のフランス部隊が居た。そして、この水域には、「振威」³³⁾、「飛雲」³³⁾、「済安」³³⁾が居たのである。この水域でこそ、これらの中国艦船は、フランスに大きく水を開けられていたが、羅星塔^{らせいとう}に居座る、より小型のフランス艦船と比較して、格段の優劣があつたわけではない。

潮は、ほとんど4ノットの速さで流れていた。中国艦隊の平均速度の約半分である。交戦の日、午後2時頃までは、満ち潮 (in flood) であった。密かな〔潮の〕動きの中で、下流の方に居た中国艦隊は、軽量化された「トリオンファン」を乗せていったのと同じ満潮によって押し流された。中国艦隊は、かくして重装備のフランス艦船が中国艦船を追跡することができる地点を超えた。それから全ての中国艦船は、クールベ提督の旗艦を含め、上流に居た軽量のフランス艦船によって始末されたのである。他方、潮がだんだんと引いていく時であれば、(もし動かなければ) 格段に優れた下流の艦隊を彼らの敵に近づけることになるだろう。敵は「トリオンファン」によって増強されることにもなるのである。そのうえ2隻の中国側の分遣隊は、船尾をフランス船団の方に向けることになり、敵の水雷艇に〔水面下にあつて〕隠れて見えない船尾突出部を攻撃できるという有利な条件を提供した。クールベ提督は、こうした〔満ち潮と引き潮のどちらを選択するかという〕二者択一に充分気が付いていた。そして、中国海軍が躊躇するのを大いに当てにしていたのである。³⁴⁾

そうした躊躇がどのようにして生じたのかは、正確には分からない。戦闘に先立つ直前の48時間については、幾つかの記事 (account) がある。先に触れたように、外国商船は、8月21日に引き揚げた。記事の一つに拠ると、(戦う意志を表示した?) 「戦書」³⁵⁾ は、その日にフランスから張成を経て何如璋に与えられた。しかし何は、それを秘密にした。他の記事に拠れば、張佩綸は〔福建の〕紳士を避けるか或いは無視したにもかかわらず、不安を感じた紳士は、22日に張を捜し出した。魏瀚³⁶⁾ は、船政局のフランス人講師を通じて、戦闘は、フランスが適当な時期を選んだ時に始まることを知っていた。李鴻章は、福州からの電信によって、攻撃は24日に始まると助言を受けた。そして、北京にそう伝えた。³⁷⁾ 張佩綸は、フランスはその日の悪天候が好転するのを待つと確信していた。そして、中国の將軍に対し、この変化は23日に起こると予測した。³⁸⁾ 実際、クールベは、22日の夜に自分の將軍たちに指令し、目標を定め、行動の合図を取り決めた。それは、「トリオンファン」が河を上って来た時に表示されるものであった。³⁹⁾

交戦した当日、すなわち23日について言えば、ある一つの記事は、フランスが一人の宣教師に宣戦布告書を持たせ、閩浙総督何璟のもとに遣わしたという。この記事では、電信を使って福州船政局に警告し注意を促すよう紳士が主張したにもかかわらず、実行されず、何璟がこのことを隠したことを明らかにしている。張佩綸は、警報として最初に大砲を放っただけであった。おそらく何如璋は、継続中の和議について〔望ましい方向に進んでいると〕話すことで、魏瀚の疑いを和らげようとした。それから魏瀚は、速やかに敵の兵船の探査に往くよう命じた張佩綸の指令を受け取ったが、魏瀚が〔中江を〕通航中に戦いが始まった。⁴⁰⁾ 後に報告されたところでは、何如璋は、午後2時に交戦が始まる23日の正午に、最初に知らされ、何は、張佩綸と何璟に知らせ、魏瀚に彼の無駄な任務を押しつけたという。⁴¹⁾ この正午の警告をめぐるのは、後で何如璋も報告しているが、それに拠ると、何は(トリオンファンを抑止するためであろうか?) その知らせを電信で長門の穆図善に伝えようとしたが、電線が切られていたという。同じく何璟も、正午の警告を回想して、船政局と長門に通報されるや否や(もし電線が切断されていたなら、どのようにして通報されたのであろうか?)、⁴²⁾ 砲撃が始まったと陳べた。⁴³⁾

人が違えば、記憶も異なる。もし我々が23日の正午の警告を受け容れるとすれば、中国には依然として約2時間の潮の優位が残っていた。フランスは、準備が出来た時に行動を開始した。そ

の時、中国艦船はまだ停泊所に船尾を係留し、まばらであった。起こった出来事について中国側の記事が矛盾しているのは、中国側の物質的・組織的なコミュニケーションが、どちらも欠如していたことを示している。それは、情報が恐らく隠蔽されたことも示している。指導者たちの間で、まとまりがなかったのである。

フランスは、汽船、火の筏 (fire raft)、要塞、陸上部隊だけでなく、100名から成る「水兵 (swimming brave)」の分遣隊にすら立ち向かった。しかし侵略者は、中国側の遅れに付け込んだ。そして、午後2時の2、3分前に、フランスの水雷艇が戦闘に送り出された。ある中国人歴史学者は、「のろのろと進んでいた中国艦隊は、急いで錨の鎖^{くさり}を切断し、船のスクリューを作動させて敵を迎えた⁴⁴⁾」と記している。中国船は5隻だけが速くに移動した。そして全艦船は、合図を送る装置が無かったため思い通りに動けなかった。一人の米国人観察者は、中国艦船を沈めるか、燃やすか、消散させる行動には、12分間の時間制限があったと推定している。中国艦船のうち、たった2隻がなんとか逃れられたのである⁴⁵⁾。それからフランス軍は、船政局の破壊に向かった。フランス側の報告に拠ると、当夜、「ヴィペール」と「トリオンファン」は、フランス製の「探照灯 (photo-electric apparati)」の助けを借りて、「瞬^{また}く間に」中国水雷艇2隻による攻撃を阻んだ (後に張佩綸は、中国は水雷艇を持っていないと報告した)。フランスの艦船は、たった二つばかりの命中弾を受けただけであった。24日には、「勝利の歌をうたいながら」退去した。そしてその時、クールベは、尊大なことに司令塔から屍の山を見渡していたのである。前に少しだけ言及したように、その途中で彼らは、船から陸に向けて後から河の要塞を撃破した。中国は、クールベが殺害されたと誤って報告した⁴⁶⁾。

中国のために戦った人々の間には、臆病だけでなく個々人の英雄崇拜主義が存在した。運命を定められたその日の午後に活動していた9隻の船のうち、福州船政学堂の卒業生が指揮していたのは、4隻に止まった。最初に攻撃された「揚武」から逃亡しようと考えたらしい張成は論外であるが、もっと品格のある人達は、船政学堂の出身にもかかわらず、当日の士気が高かったわけではなかった⁴⁷⁾。

どのような経歴をもつにせよ、福州の艦長たちは、適性に疑問の残る人たちの指揮下に置かれた。張佩綸は、山の高所から戦いを「指揮」した。張は、用心深くそこに移動したのである。何如璋も、逃亡した。穆図善は、自分の駐屯地に居た。巡撫と総督は、現場に居なかった。指導者が多すぎた。張佩綸は十分に陳謝したが、後に張が、「物事が素早く、しかも不揃いや遅れなく実行されねばならない時、一つの省に4人の軍事指導者を持つよりも、その人自身に一つの軍隊を従わせる方が良い」と書いた時、全く正しいことを陳べたのである⁴⁸⁾。

誰が罰せられるべきか？ 戦いが終わった後、独特の懲罰的な雰囲気包まれた北京では、惨敗を調査するために特命の欽差大臣を任命した。欽差大臣の左宗棠^{きんさうたう}は、先ず最初に穆図善と張佩綸の助力を受けることができた⁴⁹⁾。馬江の役の際に何が起こったのかについて、多くの報告が存在していた。そしてそれらの報告の中で、フランスは多くの損失を被ったと伝えられた。しかし、中国がその戦闘に勝ったと言おうとした者は、一人もいなかった。それに、戦争は終わってはいなかった。1884年8月26日ようやく宣戦布告を行った中国にとって、法律上の戦いは始まったばかりであった⁵⁰⁾。

クールベについて言えば、彼は艦隊を台湾に引き戻した。そして、上陸を果たすことはできな

かったにせよ、10月23日に台湾島の西海岸を封鎖した。そして、その封鎖は、1885年4月23日に至るまで効力をもち続けた。その時までには、諒山^{ランソン}における例の陸上戦で、フランスに勝利したことに刺激されて、再び交渉が始められた。ところが実際には、台湾封鎖は——可もなく不可もなく実行されたのであるが——その島を救援するという問題を生じさせた。

南洋艦隊は、李成謀^{りせいぼう}の指揮下にあった。李成謀は、福建艦隊での任務を終えた後、伝統的な長江水師^{ちょうこうすいし}で別の職^{ていとく}〔提督〕に就いた経験をもつ人物⁵¹⁾である。李成謀は、13隻の艦船を自由に使用できた。救援に向けた遠征隊を最終的に構成していた軍艦は、南洋の「南琛」と「南瑞」であった。これらの2隻は、左宗棠が注文した16ノットのドイツ製であり、それらの主力砲台には、8インチの大砲が備え付けられていた。それに、江南製造局で建造された「馭遠」^{ぎょえん}、そして福州船政局で建造された「澄慶」と「開濟」であった。

南洋の艦船だけを参加させることが意図されていたのではなかった。台湾の封鎖が知らされて以後、宮廷は李鴻章と曾国荃に対し、それぞれ「6隻か7隻の」艦船を派遣し、台湾島を救援するよう命じた。その後も続けざまに多くの指令が出され、これらの官僚たちの逃げ口上と共にまき散らされた。同じ頃〔9月7日〕、台湾を防衛するよう特命を受けた左宗棠が、救援の船についての通信を行って以後、李鴻章は曾国荃の味方となり、曾国荃はただ3隻の艦船を供給できるだけであると主張した。左宗棠は可能と言い張るけれども、南京から5隻も派遣できないのである。宮廷は、南洋大臣に対し懲罰すると脅しをかけた。結局、曾国荃は、5隻の派遣を余儀なくされた。李鴻章自身は、南洋大臣を懲罰すると脅されて以後、自分は2隻の艦船〔「超勇」と「揚威」〕を南洋艦隊からの5隻に加えるために準備していると報告した⁵²⁾。

実際、李鴻章も5隻の艦船を派遣するよう命じられていた。李鴻章が2隻だけ派遣することを引き受けるのは、有益であった。しかし彼は、最高権力者の怒りから逃れられるような婉曲的な手法をとったにせよ、この2隻すら連れ戻さねばならなかった。李鴻章は、最終的に英国製の戦艦である「超勇」と「揚威」をドイツ人のシーベリンのもとに寄せることに同意した。李の2隻の艦船は、上海の呉安康^{ごあんこう}のもとで、5隻の南洋艦船に加えられることになった。結果的に7隻の艦船により編成されることになった小艦隊は、(ドイツ人を「慰撫する」よう宮廷から指示された)楊岳斌^{やうくひん}の指揮下におかれることになった。李鴻章の2隻の船は、1884年12月の初めに上海に到着した⁵³⁾。

しかし、李鴻章にとって優先すべきは朝鮮問題であった。日本は既に、朝鮮半島で不穏な影響力を見せていた。12月10日、李鴻章は総理衙門に打電して、日本はフランスと結託しているとし、朝鮮での任務のために2隻の艦船を北洋に戻すよう求めた。馬建忠^{ばけんちゅう}は、天津にある李の水師營務処^{すいしえい}で管理人〔地位は道具〕をしていた福州船政学堂の卒業生であったが、李の命令で2隻を北洋艦隊に連れ戻すために準備した⁵⁴⁾。李の主張に取り柄がないわけではなかったため、宮廷は2隻の英国製艦船は戻さないが、中国で建造された南洋の艦船である「澄慶」と「馭遠」は、台湾救援の遠征から引き離し、華北の李鴻章に送ることを決定した。おそらく李鴻章が粗悪な2隻の艦船を受けとった政治的「代償」として、おそらく「李の部下」と見なされるドイツ人の「客員指揮官」が、李の艦船が目立つ台湾遠征を引き受けたのであろう⁵⁵⁾。

しかし李鴻章は、待機していたのではなかった。李は、既に丁汝昌^{ていじょしやう}が、北の境界に「超勇」と「揚威」を伴って、海上にいと返答した。つまり、それらの艦船は、外洋上に居るので、李

鴻章には上海に戻す術がないのである。李は、北京に宛てた12月15日付電信を通じて、中国の海軍がまだ展開し得ていない朝鮮海域における日本の艦船について報告し、自分自身〔の主張の正当性〕を補強した。⁵⁶⁾

李鴻章は、彼自身の権威 (authority) に基づいて行動した。事件が彼を救った。12月15日の諭令は、朝鮮における中国の利益に対する日本の脅威を認識していた。台湾遠征について言えば、結局のところ、先に挙げた5隻の南洋艦船から成り、呉安康 (シーベリンは李の艦船と共に李のもとに戻った) の統率のもとで、楊岳斌⁵⁷⁾が福州から台湾に至るまでを取り仕切ることになった。しかし艦船は、福州より南に行くことはなかった。フランス人は、中国司令部の戦術上の観念に大いに手助けされたとはいえ、そのことに気をつけた。以下の記述の一部は、L・C・アーリントン (L. C. Arlington) が記述したものから取られている。アーリントンは、李鴻章のかつての教練担当官であり、苦境にあった南洋救援艦隊に仕えた人物である。⁵⁸⁾

天津で李鴻章に雇われて以後、アーリントンは、1884年の末に「エス」(シーベリン)を通じて、李鴻章は彼を南洋艦隊に転任させたいと望んでいると告げられた。活動することを望まれ (それに、北洋艦隊では何も期待されていないので)、アーリントンは気軽に引き受けた。それから「エス」は、李の配下 (establishment) の中から他の外国人を選抜した。上海に到着後、選ばれた外国人たちは、南洋の旗艦「開濟」に雇われた。「エス」は華北に戻った。フランスに要撃された、という。(「超勇」と「揚威」を退いて)

アーリントンは (李鴻章との契約は、南洋艦隊では何の意味もなかったので、新しい契約を結んだ)、
「開濟」は人手が足りないうえに、乗組員の賃金は低く抑えられていると陳べた。しかし高級船員たち (officers) は、結構な生活をしていて、呉提督は、乗客として船に乗り込んだことはなかった。勇敢であるとして一度勲章を授かったことがあるとはいえ、呉淞⁵⁹⁾の要塞を管理していた時に公金横領の疑いを掛けられたのち、名誉を回復するためにこの職に任命されたのである。対照的に、艦隊副司令官の「丁汝昌⁶⁰⁾」は、勇敢で有能な海軍人であった。ここでアーリントンは、疑いなく丁「華容」⁶¹⁾に言及していた。丁汝昌は李の提督であり、当時朝鮮で李の艦船と行動を共にしていた。他の高級船員たちは、満洲人政府を嫌っていたにもかかわらず、このオブザーバーに対しては勇敢な男であるとの印象を持った。アーリントンは、彼らの訓練について全く言及していない。

空騒ぎと遅延のため、船は上海に留められたままであった。ほとんどの時間が教練に取られ、小火器 (small arms) には英語が、大型の兵器にはドイツ語が使われた。外国人は中国高級船員の恨みを買ったが、彼ら船員たちは砲術について (アーリントンが言うには) 初歩的な知識しか持っていなかった。1884年12月末に、5隻の艦船が上海を出発したのであるが、ただ呉淞に錨を降ろしただけだった。呉淞は、外国人が砲撃の試験を行った場所である。その時から艦隊は、密かに南方に針路をとったのであるが、外国人は呉提督が本当は何を見つげ出したいのか不審に思った。艦船はただ昼間だけ動き、いつも海岸から見える場所に居た。舟山での訓練と石炭供給に2週間を費やしたあと、呑気な見張り番たちは、サイコロとカード遊びに興じた。そして艦船は、「まるで娯楽部隊が率いるかのように」照らされた。3人の無名の艦長は、寧波⁶²⁾でグズグズ過ごし、彼らの艦船を「水先案内人 (pilots)」に任せてしまった。

1885年1月末、艦隊は再び南に向かって進航した。その迂回した旅は、訓練の欠如した指導者

と、艦船に陸砲を連結するお粗末な戦略との組み合わせの印⁵⁸⁾である。1月25日に、艦隊は南口^{なんこう}に停泊し、翌日には福州の200マイル北にある五環^{ごかん}に停泊し、そこから近くの温州^{おんしゅう}に進んだ。温州は、救援遠征隊が存在するという噂を流すことで台湾封鎖を検証しようと目論まれた場所である。呉提督は、商船の「華安」^{かあん}を差し出し、本気で偵察を試みた。次に艦船が、浙江沖の石浦と定海^{ていかい}で無事を報告した。その後、鎮海の海域をグズグズとさまよった。フランス人は、それらの艦船を途上で要撃した。2月10日、艦船は定海を横切り、2月11日に呉淞に戻り、2月12日に再び定海に見出された。そして、13日に危険から守られた石浦港に再び移動した。中国の暦で1884年の最後の日〔光緒十年の大晦日の夜〕に、「開濟」、「南琛」、「南瑞」は鎮海に行ったが、短時間で立ち去った。そして、(海底の?)電信線に損害を与え、他の2隻はどこにいるのか曾国荃⁵⁹⁾には分からないようにした。その時5隻は、石浦に再び集結していた。

この旅程を作り上げた指導者は、混成集団であった。我々は既に、呉提督に関するアーリントンの論評を見た。アーリントンも、旗艦の艦長である一人の「徐 (Ssu)」が、かつて上海では太平天国期に、年老いた「儒者 (Confucius)」の水先案内人であったこと、「南琛」と「南瑞」の艦長は、輪船招商局^{りんせんしょうじょうきよく}の元従業員であり、艦長の地位は購入したものであることを記録していた。「馭遠」の艦長は、金榮^{きんえい}であった。金榮は伝統的な海軍人で、多少は海上での経験を有していた。「澄慶」の艦長の蔣超英^{しょうちょうえい}は唯一、福州船政学堂の卒業生であった。アーリントンが、艦長のうち一人は外国海軍での経験を持っていたという時には、おそらく蔣のことを引き合いに出していたのである。⁶⁰⁾

1885年2月16日に、劉銘伝^{りゅうめいでん}が李鴻章に援軍を求めたこと、そして李鴻章がその近代的艦船を救援艦隊として派遣するよう宮廷から再び命じられたことは驚くに値しない。⁶¹⁾しかし、その時まで、救援艦隊の遠征は、思いがけない大きな災難に見舞われた。2月13日に曾国荃は、風が吹き霧のかかる浙江沖で、5隻の艦船が敵と遭遇したことを報告している。その戦闘で、中国艦船は離れ離れになった。そのため最も速度の遅い「澄慶」と「馭遠」は、石浦に引き返し、他の3隻は鎮海に逃れた。はぐれた2隻は、石浦で沈没した。⁶²⁾他の3隻は、鎮海口に封鎖され、長江の河口を防衛する手助けを行えなかった。

詳細からは、教訓が得られる。「馭遠」と「澄慶」は、海上から人口の多い地域に向けて砲撃されるのを防ぐため、石浦でわざと沈没させられたと噂された。水雷——実は日本製——が、沈めたのだと仄めかされもした。宮廷は、調査するよう命じた。⁶³⁾曾国荃は、心して調査した。信用の高い地方人士に意見を聞き、外国新聞すら調べられた。魚雷が命中したこと、そして、火薬艙に引火しないようにするため、艦長が石浦の艦船に穴を開けて沈没させたことが明らかになった。乗組員たちは、船から逃れた。やがて攻撃は止んだ。どのように攻撃がなされたのか？曾国荃は、たとえ小型水雷艇だけが参戦していたとしても、艦長はそれらを撃退するのに十分な警戒態勢をとるべきであったと考えた。⁶⁴⁾

アーリントンの年代記には2日分が欠落しているが、石浦における目撃者の経験に関する彼の回想には、興味深いものがある。2月11日（実際には、13日）の午後3時に、漁夫が、石浦にいる5隻の艦船に対し、フランス艦隊が接近していることを知らせた。総員配置が発せられた（アーリントンの観察では、全般的に混乱状態にあっただけである）。その日の夜10時に、敵は囲まれた港のちょうど外側に居ると伝えられた。呉提督は、アーリントンを偵察隊と共に、その報告を確認す

るのに有利な地点に派遣した。暗闇の中で幾つかの閃光が、おそらくフランス汽艇 (steam launch) から発せられ、アーリントンの部隊に居る人々を刺激して、激しい火蓋が切られた。待機する軍艦の上でピリピリしていた中国人乗組員からの発砲であった。アーリントンは、彼が最終的にどうにか無事に船に戻れたことに驚いた。旗艦は、大騒ぎであった。総員配置の号笛が鳴らされ、錨を抜いて、同じように熱狂的に活動した。翌日には、9隻の艦船が外側に見えた。それらの艦船は、重火砲を発して火蓋を切り、(旗艦にいる外国人の一人が、躊躇することなく、中国人の指揮官にくたばってしまった後で) 中国人は、遂に〔石浦港から〕出て敵と戦う決心をした。

戦闘の陣形は、旗艦の「開濟」を真ん中にし、右側には「南琛」と「南瑞」、左側には「馭遠」と「澄慶」が梯陣をなしていた。乗組員は酒に酔っていたが、十分に勇ましかったと、アーリントンは回想している。戦争の神は、意見を聞かれた。艦船が石浦港を出港した時、旗艦と右の梯陣は、鎮海に向かって走り、速度の遅い中国製の「馭遠」と「澄慶」は、石浦に引き返すことになった。

アーリントンは、この計画はマキャベリ流であると書いた。「丁汝昌」(丁華容)は、石浦の一組の指揮を任された。その理由は、呉提督が丁を嫌悪し、おそらく彼が死ぬのを見たいと思っていたからであるか、或いは少なくとものろまな2隻の艦船を喪失するためのスケープゴートにしたいと思ったのである。呉はこの2隻が彼の足手まといになることを知っていたのだ。その前の夜になって、丁はやっと「馭遠」を密かに移動させた。少し遅れてアーリントンもやって来た。(アーリントンは、「馭遠」には良き外国人指導者がいなかったため、訓練は締まりがなかったと書いている。)

見捨てられた丁華容は、陸上にいる役人から援助して貰えなかった。⁶⁵⁾ 將軍の金榮と蔣超英は、丁の直接指揮下にあったが、良い停泊所を選んだ。しかしアーリントンは、金榮が砲弾の装填された大砲を持っていないことを知っていた。それでアーリントンは、「馭遠」の艦橋 (bridge) に備え付けられたノーデンフェルト砲に個人的に砲弾を込めた。そして、もしジャンクが石浦に進入すれば、通知するよう甲板 (deck) の船員に頼んでおいた。真夜中を過ぎてから、彼は呼び起こされた。たくさんの光を見たが、それは漁夫の発したものであった。更に午前4時30分には、敵が侵入しているとの情報が伝えられた。アーリントンは、65の光を数えた。そして、2、3隻のジャンクが入口の近くで動いているのが見えた。「光のフラッシュのように」、何者かジャンクの背後から接近した時、彼は、威嚇するため、ノーデンフェルト砲を高く発射した。そして、魚雷が放たれた。敵の水雷艇は、「高い報酬を得た」漁民の陰に入ったことが後に明らかにされている。それは、「馭遠」の最期であった。アーリントンは、いつ「澄慶」が攻撃されたかについては語っていないが、「馭遠」の最後については言及している。

続いて起こった場面は、「筆舌に尽くしがたかった」。気違いじみた緊急発進のために、兵士、船員、カモ、ガチョウ、手荷物、それに甲板からの浮き荷が、海面に存在した。20分で戦闘は終わった。金榮は、勇敢な行為の結末(彼はその船に穴を開けて沈めることができた)まで、彼の「馭遠」に留まっていた。そしてその勇敢さは、「誤りは、全面的に中国人にある」とするアーリントンの結論を幾分か相殺したのである。⁶⁶⁾

クールベ提督自身は、2月13~14日の夜に、音の静かなエンジンと黒い船体を持つ、2隻の30

フィートの汽艇が、29ポンドの円柱型魚雷を擁して、港に侵入した。困難な調査を経て、彼らはいくつかの生け贄を見つけた（アーリントンが艦橋砲を放ったのが役に立ったかも知れない）。そして、3時30分に攻撃した。1隻の船だけが攻撃された。そのとき別の1隻（「澄慶」）は、明らかに乗組員により船体に穴を開けられ沈められた。⁶⁷⁾

外国人による記述は、最も信頼できるものではないかも知れない。それに、その動機に加えて、船を沈めたことに関する曾国荃の報告（先に引用した）は、間違いがないかも知れない。他にも、運悪く台湾を救援する遠征に向かう3隻の艦船が取り残されていた。

鎮海の呉提督は、石浦の知らせに怒り狂った。そして、丁華容、金榮、蔣超英、アーリントンが彼に報告した時、「軍法会議」（アーリントンの言葉）が開かれた。アーリントンが見ることのできた限りで、呉は裁判官になりきっていた。丁は、沈黙させられた。「正式の」手続きが終了した後、呉の船室では、二人の主役の間で長く大声での口論が続いた。それでも、丁は、アーリントンと同じように、「開済」の艦内に抱えられた。⁶⁸⁾ 為すべきことは、多くはなかった。封鎖中のフランス艦船を攻撃して、きっちりと港外に追っ払うこと、そして包囲された船については、一か八か支配地上陸する（visit ashore the rule）ことであった。そのことは、石浦で実行するよりも、鎮海の方が安全であった。

実際、鎮海に封鎖された5隻の中国艦船が存在した。3隻の南洋艦船に、「超武」と「元凱」^{げんがい}が加わった。「超武」と「元凱」の2隻について、アーリントンは、「我々の艦隊とは何の関係もないし、彼らの方でも関わることを望まなかった広東の艦船」⁶⁹⁾と陳べている。4隻のフランス艦船は、その時には7隻になって注視していた。さらに言えば、呉自身がここに乗り込むのは、容易ではなかった。というのも、急追された彼の3隻の艦船は、寧波の守護者からきっぱりと〔寧波から〕離れるよう命ぜられて、〔鎮海に〕力づくで入場しなければならなかったからである。⁷⁰⁾ そして呉は入場し、長江へ移動するよう命ぜられたにもかかわらず、この地に滞在した。長江は、封鎖していた別のフランス軍が、呉を締め出した場所であった。⁷¹⁾

封鎖する側のフランス軍を封鎖するべく、艦船を南へ派遣することで、李鴻章は、鎮海での行き詰まりを打破したかも知れない。しかし指令に対し、李は、フランスが鎮海の艦隊を閉じ込めることができるのであれば、李の2隻の艦船を中に入れられないようにできるとの趣旨の応答をした。この李鴻章の言い分は、十分理に^{かな}適っている。膠着状態は、1885年4月15日に休戦になるまで続いた。1885年6月28日、最後のフランス艦が鎮海を去った。⁷²⁾

封鎖された艦船の中での生活に関するアーリントンの話は、取るに足りない出来事に満ちている。すなわち、間抜けな紳士の訪問者、岩の障壁を視察するために派遣された哨兵が小型船の中で居眠りをしている様子、ほとんど一斉蜂起になりかけたこと等々である。非常に興味深いのは、地方住民の態度である。この多難な時期、その地域の土着民たちは、鎮海を「防衛する者」の苦境に対し無関心であった。そうした無関心は、戦闘員に向けた支援不足の前兆となった。そしてこの支援不足によって、新しい海軍の社会的孤立をいっそう深いものにした。ナショナリズムは、全く存在しなかつた。⁷³⁾ 中仏間で時折代わる代わる砲撃がなされた後で、農民たちは河の干潟からフランスの不発弾を掘り出して、売りに出した。時々その砲弾が破裂し、事業主を死亡させたこともあった。海軍の役人の中にも砲弾を売る者がいたから、敵の砲弾が中国の砲身の中で再利用された可能性がある。何とも驚くべき経済だ！ 最後に、アーリントンは、中国の大砲の多くは

空っぽであると報告した。⁷⁴⁾

左宗棠の建議に従って、懲戒が加えられた。馬江の役で一撃を食らった旗艦の「揚武」から逃げ去った張成は、斬首された。「馭遠」に配属された船員の李時珍も、逃亡した廉で打ち首にされた。左宗棠は、金榮と蔣超英は降格処分にし、流罪には処しないよう求めた。それにもかかわらず、彼らは流罪になった。丁華容と呉提督は、免責された。宮廷は、左宗棠自身と李鴻章すら懲戒するよう命じたが、影響力のあるこの二人の官僚が懲罰を逃れたのは、驚くに値しない。⁷⁵⁾ 宮廷の軍事法廷によって残されるような、詳しい記録は存在しないなかで、これだけは言うことが出来る。つまり、命じられた懲罰は、全面的には矛盾していないように思われること、そしてこれらの刑罰の重さは、命令系統の最下層に於いて最も重たかったことである。

アーリントンによる記述やそれ以外の典拠に拠ると、南洋艦隊での訓練の水準が高くなかったとの結論が下されるかも知れない。蓋し、訓練を受けた艦長の率が比較的高い福建艦隊は、より良く訓練され、より統制された軍隊であった。馬江の役において反抗が企てられた唯一の実例がある。「福星」の砲手たちは、福州で訓練を受けた艦長の陳英に交戦現場から離れたいと嘆願した。しかし陳英は、駄目だと言った。アーリントンは、鎮海でたった一つの反乱状態を報告している。しかしこの砲手の反乱は、それに相応しい自国指揮官が効果的な訓戒を垂れることで解決したというよりは、⁷⁶⁾ 外国人が拳銃を振りかざすことで解決できたに過ぎないと報告するのである。その違いは決定的である。

中国はフランスとの戦争に敗れはしたが、フランスが圧倒的に強かったと解釈するほど簡単ではない。フランスは、中国が初めて経験する近代的海軍による戦争において、海軍力の優越という余裕を持っていたにもかかわらず、アヘン戦争における英国や、或いは1856～1860年の第二次アヘン戦争〔アロー戦争ともいう〕における英仏連合国により享受されていたような優越は、存在しなかった。対仏戦争における中国側の問題というのは、中国海軍の物質的側面に基づいていたのではなく、リーダーシップの構造や帝国の政治組織に基づいていた。中国海軍の人員は、十分な訓練を受けておらず、新しい艦船に適した海軍戦略について何も理解していなかった。近代的海軍へ転換は、非常に大きな社会的・政治的・財政的軋轢を蒙りやすかった。儒教国たる中国の制度基盤において、その最初の実地試験に際して、「自強の担い手 (self-strengtheners)」^{あつれき}なる海軍は、依然として孤立していた。

註

- 1) Li Chien-ning, *The Political History of China, 1840-1928*, tr. Ssuyu Teng and Jeremy Ingalls, New York, 1956, p. 121. [訳註：李劍農『中国近百年政治史』上冊，台湾商務印書館，151頁に、「此次法国的成功，成功於僥倖；中国的失敗，失敗於寡斷。」とある。]
- 2) 李鴻章は、李鳳苞に宛てた1882年1月11日付の書簡の中で、アームストロング製の砲艦を13隻購入したと陳べている。「致李丹崖星使」『李文忠公朋僚函稿』巻20，20～21頁，参照。これら13隻の「蚊船」のうち、私が名前が判明し得たのは11隻だけである。付録C [訳註：本稿では割愛した]を参照のこと。
- 3) 包遵彭『中国海軍史』（台北，1951年），245頁，に拠ると，1884年に，南洋艦隊は17隻，北洋艦隊は14隻，福建艦隊は11隻を擁した。
- 4) Young to Frelinghuysen, Feb. 11, 1884, *Foreign Relations of the United States* (1884), pp. 67-

- 69, 及び, Apr. 18, 1884, *ibid.*, p. 96. を参照のこと。総理衙門は、この問題については張之洞の独自性を支持した。張佩綸は、総理衙門がただ「最も重大な躊躇」だけで介入しようとしたと申し立てた。後に、張佩綸が閩江の防衛を担当していた時、諭令による命令がなければ、その河を封鎖しようとしなかった(『清季外交史料』巻44, 1~3頁, 1884年8月11日付)。後に同じような状況下で、左宗棠は自ら率先して行動した(『清季外交史料』巻53, 8頁, 1885年2月18日付)。李鴻章の考えは、たとえ外国人が(誰に?) 助言されても、そうした封鎖は非常時に実行できるというものであった。李は、この趣意を回覧するよう総理衙門に求めた(『清季外交史料』巻43, 16~17頁, 1884年7月2日付)。広東での河川封鎖に関するより詳しい知見は、*Imperial Maritime Customs: Dce. Repts., 1882-1891, Canton*, pp. 574-575. を参照のこと。
- 5) 1884年8月12日から9月10日に至る閩浙総督等の上奏文を通じて、防備を固められた場所名やその他の詳しい事実について知ることができる。『籌辦夷務始末』同治, 巻96, 22~25頁を参照のこと。〔訳註：ここで典拠とされた史料は、福州將軍文煜、閩浙總督李鶴年、福建巡撫王凱泰の連名による上奏文で、同治十三年六月初五日(1874年7月18日)に受理されている。北は浙江省と境界を接する福寧府から、南は広東省と境界を接する南澳鎮に至る福建省海域における海防について詳細な情報が得られる史料であることは確かであるが、あくまで1874年7月に起草された時点でのそれであることに注意しなければならない。原書では、同治十三年(1874)の史料を使いながら、「1884年8月12日から9月10日に至る(Aug. 12-Sept. 10, 1884)」とするのは、理解に苦しむところである。〕
- 6) 1884年8月11日付の張佩綸による報告書を参照のこと。『清季外交史料』巻44, 1~3頁。また、Capt. Cha-baud-Arnault (French navy), "Combats in the Min River," tr. Lt. E. B. Barry, *United States Naval Institute Proceedings*, 11. 2: 308 (1885). 後者は、クールベの報告書に基づいている。また、H. W. Wilson, *Ironclads in Action*, 2 vols. (Boston, 1898), II, 2, and map on p. xix. も併せて参照のこと。
- 7) 李鴻章は、1884年8月30日に懸念を表していた。『清季外交史料』巻45, 25頁。宮廷は、1884年9月2日の諭令において裁可している。『清季外交史料』巻46, 1頁。
- 8) 1884年7月に曾は全権大臣に任命され、上海で交渉に当たった。そして、全権大臣の肩書きで方々に電信を送っている(『清季外交史料』に散見)。李は1885年の初めに至ってはじめて同様の肩書きを得た。『清季外交史料』巻54, 28頁(1885年3月22日付)。
- 9) 1884年6月にフランス人が中国人の水先案内人を雇って手助けさせることを禁じた問題のように、時々李鴻章は、海岸に関する宮廷の指令を拒絶することを要求された。この点については、『中法戦争』五, 419頁、及び『清季外交史料』巻42, 7頁を参照のこと。他の時に宮廷は、李や曾國荃には内密に(without mention of routing) 將軍、督撫、統兵大臣等に指令し、急いでフランス軍との戦闘に備えるよう命じた。注意を要する論旨は、『清季外交史料』巻42, 4~5頁。諸個人に送られた指令もある。例えば、1884年の末に浙江巡撫の劉秉璋に送られた電信、そしてこれとは別に山東巡撫〔陳士杰〕及び李鴻章に送られた電信は、警戒を促している。『清季外交史料』巻46, 15頁。上海道台の邵友濂は、総理衙門等に対し情報を直接提供した。『清季外交史料』巻45, 11頁、及び巻46, 5~6頁。張之洞の報告書については、『清季外交史料』巻52, 34頁、及び巻53, 30頁を参照のこと。
- 10) 李の電信については、『中法戦争』五, 408頁を参照のこと。1884年4月25日には既に、邵友濂はフランスが8隻の軍艦を北上させていることを宮廷に警告していた。防衛官僚たちは、それに伴い宮廷により警告された。『中法戦争』五, 313頁に引く『清光緒朝中日交渉史料』を参照のこと。
- 11) 何如璋は、1884年7月19日に受け取った電信の中で、その最初の船について報告した。『船政奏議彙編』巻25, 10~11頁。7月13日という日付は、ハンメルにおける張佩綸の項目に拠る〔Hummel, ed. *Eminent Chinese of the Ch'ing Period, 1644-1911*, vol. I, p. 48.〕。「軍人」及び阻害問題については、1884年8月13日付の張佩綸による報告書(『清季外交史料』巻44, 1~3頁)を参照のこと。
- 12) 『中法戦争』五, 414頁。また、『清季外交史料』巻41, 27頁。
- 13) 池仲祐『海軍大事記』, 365頁、は、これらの侵入により引き起こされた法的な情勢について論じて

- いる。〔訳註：池仲祐『海軍大事記』は、左舜生『中国近百年史資料続編』上下2冊，中華書局刊，323～385頁，に収められている。〕文中で示されたフランス諸船の名称は、私の推測である。フランス艦船の名称は既知のものであるが、これをしばしば不明瞭な中国語の音声からの翻訳と結び付ける試みに基づいている。
- 14) 期限については、李鴻章から軍機処へ宛てた1884年7月19日付の電信を参照のこと。『清季外交史料』巻42，6頁。他の諸船については、1884年8月14日付の張佩綸による報告書を参照のこと。『清季外交史料』巻44，9～12頁。
 - 15) 張佩綸による報告書及び論旨は、『清季外交史料』巻44，1～3頁，9～12頁。
 - 16) 張佩綸による電信は、『清季外交史料』巻43，9頁，を参照のこと。河の封鎖に関する総理衙門の返答については、『清季外交史料』巻43，11頁（1884年8月5日付）を参照のこと。造船所の破壊を総理衙門が認可したことについては、『清季外交史料』巻44，4頁，を参照のこと。
 - 17) 1884年7月16日付の穆函善による報告書，及び諭令については、『清季外交史料』巻42，2頁，4～5頁。
 - 18) 1884年7月19日付の何如璋による報告書は、『船政奏議彙編』巻26，10～11頁を参照のこと。何は4隻のフランス船について報告している。張佩綸は、1884年8月14日に受理された報告書の中で、中国はほぼ同じ時間にたった3隻の船を有しただけであると陳べている（『清季外交史料』巻44，9～12頁）。その他の詳細は、『船政奏議彙編』巻26，12～14，及び『清季外交史料』巻42，11頁，19～20頁，を参照のこと。
 - 19) 劉秉璋の電信は、『清季外交史料』巻42，19～20頁。李鴻章に対する1884年7月25日付の諭令は、『清季外交史料』巻42，20頁。1884年7月26日付の張佩綸による報告書は、『清季外交史料』巻42，21頁。諭令に対する李鴻章の返答は、『清季外交史料』巻42，21頁。張佩綸による報告書，及び1884年7月29日付宮廷からの返答は『清季外交史料』巻42，30頁。また、『中法戦争』五，447～448頁。
 - 20) 報告書については、『清季外交史料』巻43，26～27頁；巻44，1～3頁，9～12頁を参照のこと。これらは全て1884年8月13日から14日に受理された。『中法戦争』五，430頁（1884年7月27日付）を参照のこと。
 - 21) 張之洞は、船政局が危険な状況下にあることに同意見であった。『清季外交史料』巻43，3頁（1884年8月4日付）。北洋大臣を代行していた張樹声は、派遣された船を何れも広東の船であると記していた。『清季外交史料』巻45，28頁。1882年から1884年に至るまでのメンテナンスについては、『船政奏議彙編』に、黎兆棠による1882年7月2日付の報告書があるので、参照のこと。両艦は、馬江の役で沈没させられた。『清季外交史料』巻45，19～20頁。
 - 22) 『清季外交史料』巻43，10～11頁。馬尾の停泊地に中国の軍艦が次々と到着したことについて幾つかの証拠がある。1884年9月16日に受理された上奏文の中で、張佩綸は、何如璋が「振威」と「伏波」を「呼び戻した」こと、張之洞が「飛雲」と「濟安」を派遣したこと、「福星」と「芸新」、そして「1隻の軍艦と1隻の商用汽船」もやって来たことを書き記した。日付の記載がないが、——李鴻章が畏れたにもかかわらず——フランスは明らかにそれらの艦船を入場させたのである。張之洞の報告書は、『清季外交史料』巻46，19～22頁に収められている。
 - 23) 『清季外交史料』巻43，26～27頁。
 - 24) 『清季外交史料』巻44，19頁，21頁，24頁（1884年8月14，15，18日付）。
 - 25) 『中法戦争』五，502頁。同じ日に、曾国荃に対し発せられた同様の指令については、『中法戦争』五，503頁，を参照のこと。
 - 26) 1884年8月19日付、福州の当局者による救援要請については、『清季外交史料』巻44，29頁。軍隊に関する宮廷の問い合わせについては、『清季外交史料』巻44，30頁（また、1884年8月20日付。もちろんそれは最初に送られた）。張佩綸に対する指令は、『清季外交史料』巻45，1頁。曾国荃の任命と李鴻章への諭令は、『清季外交史料』巻45，2頁。
 - 27) 何如璋の報告書は、『清季外交史料』巻45，4頁。新たな援軍要請と宮廷の承認は、『清季外交史

- 料』巻45, 5頁。
- 28) H. B. Morse, *The Trade and Administration of China* (Shanghai, 1913), pp. 41-42, は、その電信が権力の中央集権化を促進する傾向を有すると主張する。
- 29) Chabaud-Arnault, Capt. "Combats on the Min River," tr. Lt. E. B. Barry, U. S. N., *United States Naval Institute Proceedings*, 11. 2: 295-320 (1885), p. 296. *Imperial Maritime Customs: Dec. Repts., 1882-1891*, Foochow, p. 419. 参戦した中国の軍艦に関する正確な一覧表を作成するのは困難である。11という数は、池仲祐『海軍大事記』及び H. W. Wilson, *Ironclads in Action*, II, 302. に拠る。『中法戦争』三, 131~132頁にある記事は、9隻の船と2隻の輸送船とする。(輸送船のうち1隻は、福州船政局で建造され、李鴻章の輪船招商局の一覧表に載せられた1450噸の「海鏡」であり、もう1隻は「汀杭」である。私は今のところ、後者に関する記録物を持ち合わせていない。)
- 30) H. W. Wilson, *Ironclads in Action*, II, Table X, p. 302, に拠ると、参戦したフランスの船は8隻である。*Imperial Maritime Customs: Dec. Repts., 1882-1891*, Foochow, p. 419. では、9隻とする。私は、8隻以上の船の名前を見つけれなかった。
- 31) Chabaud-Arnault, Capt. "Combats on the Min River," p. 296. 及び H. W. Wilson, *Ironclads in Action*, II, 4-12.
- 32) 『籌辦夷務始末』同治, 巻50, 2~4頁。
- 33) 池仲祐『海軍大事記』336頁は、張成に批判的である。
- 34) Loir の L'Escadre de L'Admiral Courbet の抄訳からの引用は、『中法戦争』三, 548~549頁。この引用からクールベの言い分が知られる。クールベは、中国人が躊躇したのは決定的に重要であり、クールベ自身の交戦は潮の満ち干によって決着が着き、クールベは彼の軍艦に対して中国船が船尾を向けることを期待していたと陳べている。
- 35) 池仲祐『海軍大事記』366頁。
- 36) 鄭祖庚『閩縣郷土志』(1903年), 78頁。記事は、池仲祐『海軍大事記』と大体同じである。
- 37) 『清季外交史料』巻45, 7~8頁(1884年8月24日受理)
- 38) 『中法戦争』五, 523~525頁。
- 39) 戦闘に関しては、H. W. Wilson, *Ironclads in Action*, II, 4-12. を参照。
- 40) 池仲祐『海軍大事記』, 331~332頁。
- 41) 『中法戦争』五〔訳註: 三の誤り〕, 132~133頁。
- 42) 『清季外交史料』巻47, 1~4頁(1884年9月19日付)
- 43) 『中法戦争』五, 512頁(1884年8月23日付)。
- 44) 池仲祐『海軍大事記』365~366頁。〔訳註: 典拠に当たってみると、この引用箇所は、「我船急鉦鑼鼓輪迎敵」を英訳したものである。ここで原著者は「鼓輪」を「太鼓をたたきながら (with drums sounding)」と訳しているが、私には正確ではないように思われる。〕
- 45) Gideon Chen, *Tso Tsung-t'ang, Pioneer Promoter of the Modern Dockyard and the Woolen Mill in China*, Peiping, 1938, p. 44. これまで引用した幾つかの記事に拠ると、「揚武」は沈められた。「福星」は爆発した(沈没したのは疑う余地がない)。「振威」は、燃えて戦闘から脱落した。火は「飛雲」と「済安」(沈没した)も奪った。「福勝」は沈められた。「建勝」は沈められた。「永保」と「琛航」は、船政局に往く途上で破壊された(後に何如璋は、これらの2隻が交戦中に衝突したと報告しているのであるが……, 『清季外交史料』巻46, 16~17頁)。「芸新」と「伏波」は、戦闘から逃げ去った。
- 46) Chabaud-Arnault, Capt. "Combats on the Min River," p. 302.
- 47) 福州船政学堂の関係者は、張成(「揚武」)、陳英(「福星」)、葉琛(「福勝」)、林森林(「建勝」)。その他の艦長は、許寿山(「振威」)、高騰雲(「飛雲」)、呂文英(「伏波」)、林則友(「芸新」)。「済安」の艦長の名前に関する資料は、持ち合わせていない。
- 48) 『清季外交史料』巻46, 12頁。

- 49) 『清季外交史料』巻46, 12頁(1884年9月7日付)。張佩綸は、船政局の監督を兼務していた。
- 50) 交戦に関する報告書について、論説が書かれた。論説の中では、フランス艦船のために、「壊され」、「燃やされ」、「無きものにされた」というような言葉が使用されている。典型例として、何如璋による報告書については、『清季外交史料』巻46, 16~17頁, 巻47, 1~4頁。及び『船政奏議彙編』巻25, 20頁を参照。張佩綸による報告書は、『清季外交史料』巻45, 8~9頁; 巻46, 19~21頁。『船政奏議彙編』巻28, 12~14頁。戦争の宣戦布告については、『中法戦争』五, 517~520頁を参照。
- 51) 趙爾巽編『清史稿』(1937年)兵志, 巻7「海軍」, 5頁。〔訳註: 『清史稿』第14冊, 4036頁, 中華書局(標点本), 1976年7月第1版。〕
- 52) 諭令については、『清季外交史料』巻48, 7~8頁(1884年10月24日付)。左宗棠の報告については、1884年11月6日付の論旨(『清季外交史料』巻48, 22頁)に引用されている。その中に、南洋大臣に対する懲戒を仄めかす部分も含んでいる。1884年11月9日に李鴻章は、麾下の「超勇」と「揚威」の準備が出来ていると報告している。『清季外交史料』巻48, 24頁。
- 53) 曾国荃による報告は、『清季外交史料』巻48, 27頁。1884年11月16日付の李鴻章による報告は、『清季外交史料』巻49, 2~4頁。李の船が到着したことを伝えた曾国荃の報告は、『清季外交史料』巻49, 22頁(1884年12月6日付)。
- 54) 朝鮮問題や船の必要に関して李鴻章と宮廷の間で交わされた通信については、『清季外交史料』巻49, 26~27頁; 巻50, 6頁, 9頁, 10~11頁, 12頁, 12~13頁, 17頁。
- 55) 『清季外交史料』巻50, 6頁(1884年12月14日付)。
- 56) 『清季外交史料』巻50, 9頁(1884年12月14日付), 10頁(12月15日付)。
- 57) 諭令については、『清季外交史料』巻50, 10~12頁。救援艦隊に関する指令については、『清季外交史料』巻50, 12頁(1884年12月17日付)。
- 58) L. C. Arlington, *Through the Dragon's Eyes*, London, 1931. の第3章から第8章。アーリントン は、出来事が記されてから数年後の記憶を基に書いたのであるが、彼の実証できた事実は、(彼の年譜において1日か2日のずれがあるのであるが) 公的な記録とほとんど一致している。彼が実証できなかった事実は、そうした道理があるのである。
- 59) この道程については、『清季外交史料』巻52, 20頁, 21頁, 及び巻53, 1頁に載せられた曾国荃による報告書, それに池仲祐『海軍大事記』の記事を総合したものである。
- 60) 金榮について言及したものとして, Arlington, *Through the Dragon's Eyes*, pp.19-20. 及び『清季外交史料』巻56, 37頁。
- 61) 『清季外交史料』巻53, 1頁, 2頁。
- 62) 1884年2月20日付の曾国荃による報告は、『清季外交史料』巻53, 19頁。後に書かれた『清季外交史料』巻54, 25~38頁に所載の報告も併せて参照のこと。閩浙総督と張之洞も、それぞれこれらの進展について報告していた。『清季外交史料』巻54, 17~19頁(1885年3月21日)及び『清季外交史料』巻56, 14~17頁(1885年3月28日付)を参照のこと。
- 63) 池仲祐『海軍大事記』370頁, は、艦船が故意に逃走したことを強調している。
- 64) 1885年4月25日付の曾国荃による報告は、『清季外交史料』巻56, 34~37頁。
- 65) 池仲祐『海軍大事記』370頁, が指摘している。〔訳註: 7隻のフランス軍艦が石浦に入港した中国艦船の出路を阻んだとき, 丁華容は急いで两江総督曾国荃に打電し救援を求めたが, 返事をもらえなかったという。〕
- 66) 石浦の結果については, Arlington, *Through the Dragon's Eyes*, pp.32-43, を参照のこと。引用は, 42頁にある。
- 67) クールベについて言及するのは, H. W. Wilson, *Ironclads in Action*, II, 13-15. *Imperial Maritime Customs, Decennial Reports., 1882-1891*, 寧波, 346~347頁, は, フランスの魚雷は, 2隻のジャンク漁船の間に隠れていたフランス小艦隊から発射されたという。
- 68) Arlington, *Through the Dragon's Eyes*, London, 1930, pp.49-50.

- 69) *Ibid.*, p. 48.
- 70) *Ibid.*, p. 50.
- 71) 『清季外交史料』巻53, 25頁（1885年3月2日付）。
- 72) 1885年3月8日付の李鴻章による報告は『清季外交史料』巻54, 3頁。〔訳註：この典拠の原文は、次の通り。「……查北洋両快船与琛瑞濟, 実不足敵法艦。現有兩鉄甲扼鎮口之游山, 南三船不能出, 猶北兩船不能入。況大赤山一帶洋面更有法船遊弋, 阻我進路。〕最後のフランス船が出港した日付は, *Imperial Maritime Customs, Decennial Reports., 1882-1891*, 寧波, 346頁。
- 73) 曾紀沢による報告の中には、在外中国人の間で、興味深い初期ナショナリズムが現れている。曾紀沢は総理衙門に電信を送り、イギリス外務省が、シンガポールの華人が当地でフランス船を粉砕したと曾に伝えたことを報告していた（『清季外交史料』巻47, 11頁, 1884年9月28日付）。大陸では、住民がフランスを支援しない試みが辛抱強くなされなければならなかった。例えば、張之洞に対する1884年8月24日付の論旨を参照のこと（『清季外交史料』巻45, 10頁）。この論旨が出されたのは、馬江での大敗の直後であった。
- 74) 鎮海での事件については, *Arlington, Through the Dragon's Eyes*, pp. 59-85. を参照のこと。砲弾を掘り起こしたことについては、同書の59~60頁を参照のこと。
- 75) 『清季外交史料』巻56, 34~37頁（1885年3月25日付）。
- 76) 馬江における陳英事件については、同上を参照のこと。鎮海の一斉蜂起については, *Arlington, Through the Dragon's Eyes*, pp. 60-62. アーリントンは、呉提督が外国人に鎮圧するよう命じたと報告する。ピストルを振りかざしたのは、アーリントン自身であった。